

フェノバルビタール反応性唾液腺症と診断した犬 4 例

○戸島 篤史¹⁾，中島 亘¹⁾ 野村 陽¹⁾，井上 知香¹⁾，白石 陽造¹⁾

1) 日本小動物医療センター総合診療科・消化器科

はじめに

フェノバルビタール反応性唾液腺症は、過剰な唾液分泌、嘔吐や悪心、唾液腺の腫大、フェノバルビタール投薬に著効を示す事などを特徴とする疾患であり、ヒトと犬において過去に報告がなされている。本疾患の病態は解明されていないが、フェノバルビタールに反応する事から非定型のてんかんであることが疑われている。今回我々は、犬 4 例をフェノバルビタール反応性唾液腺症と診断し治療を行ったので、その概要を報告する。

症例

症例 1：パピヨン、1 歳、避妊雌。流涎、食欲不振、活動性低下、嘔吐、体重減少、沈うつを呈し、身体検査にて下顎腺腫大が認められた。血液検査、X 線検査、超音波検査、下顎腺針吸引検査、消化管内視鏡検査を行ったが著変はみられず、療法食、抗菌薬、制酸剤、制吐薬、消化管粘膜保護薬、静脈輸液などによる治療に反応しなかった。

症例 2：パピヨン、6 歳、去勢雄。唾液量の増加、悪心、落ち着きが無いなどの症状を呈していた。唾液腺腫大は認められず、血液検査、糞便検査、X 線検査、超音波検査において異常所見はみられなかった。低アレルギー食、駆虫薬、抗菌薬、制酸剤、制吐薬の投与を行ったが、症状の改善はみられなかった。

症例 3：トイプードル、2 歳、避妊雌。2 か月前に食道内異物(りんごの芯)を内視鏡下にて除去したが、その後より流涎、嘔吐、食欲不振、元気低下、体重減少、異常行動、下顎腺腫大がみられた。血液検査、尿検査、X 線検査、超音波検査、下顎腺針吸引検査を行ったが著変はなく、再び消化管内視鏡を行ったが異物による食道炎もみられなかった。また探索的開腹手術も実施したが、明らかな異常所見は認められなかった。療法食、抗菌薬、制酸剤、制吐薬、消化管粘膜保護薬、NSAID、静脈輸液などによる治療を行ったが、症状は改善しなかった。

症例 4：トイプードル、10 歳、避妊雌。症状は流涎、鼻汁、鼻閉塞であった。唾液腺腫大はみられず、血液検査、X 線検査、超音波検査、頭部 CT・MRI 検査、脳脊髄液検査を実施したが著変はみられなかった。プレドニゾロン、強肝剤などの治療には反応しなかった。

これらの 4 症例に対して全ての薬剤を中止した後に、フェノバルビタールを投与したところ、症状が速やかに、また劇的に改善し、フェノバルビタール反応性唾液腺症と診断した。

考察

フェノバルビタール反応性唾液腺症は発生がまれであるため、一般に認識されていない疾患であるが、過剰な唾液分泌などを呈する犬において、明らかな原因疾患が認められない場合には、フェノバルビタールの試験的な投与も考慮すべきと考えられた。

☆第9回日本獣医内科学アカデミー学術大会 (JCVM2013)

フェノバルビタール反応性唾液腺症 と診断した犬4例

戸島 篤史¹⁾、中島 亘^{1,2)}、野村 陽¹⁾、井上 知香¹⁾、白石 陽造¹⁾

1) 日本小動物医療センター 総合診療科、2) 消化器科

流涎を呈する主な疾患

- 口腔内疾患
歯、異物、腫瘍、潰瘍、炎症
- 胃腸疾患
食道炎、巨大食道症、異物、裂孔ヘルニア、胃炎
- 唾液腺疾患
唾液腺壊死、唾液腺炎、唾液腺嚢腫、唾石症、梗塞
- 神経疾患
頭蓋内腫瘍、肝性脳症、重症筋無力症
部分発作、カタレプシー、ナルコレプシー
- その他
フェノバルビタール反応性唾液腺症

Alex Gough, *Differential Diagnosis in Small Anim Med*, Blackwell Publishing, 2007
B.Terry, *et Veterinary Technician*, 2010. J.Stonehewer, *et J Small Anim Pract*, 2000

犬のフェノバルビタール反応性 唾液腺症

- 好発犬種、性差なし
- 年齢：6ヶ月-17歳
- 臨床徴候
 - 流涎、吐出、悪心、嘔吐、食欲不振
 - 体重減少、唾液腺腫大
- 病態：不明
 - 大脳辺縁系てんかんの疑い

J. Stonehewer, *et J Small Anim Pract*, 2000. B.Terry, *et Veterinary Technician*, 2010
Chen G, *et J Am Anim Hosp Assoc*, 2010

犬のフェノバルビタール反応性 唾液腺症

- 診断
 - 他の疾患除外
 - フェノバルビタールの迅速かつ良好な反応性
- 治療
 - フェノバルビタール(1-5 mg/kg BID)
- 予後
 - 診断、治療されれば良好

Pip Boydell *et J Am Vet Med Assoc*, 2000

症例 1

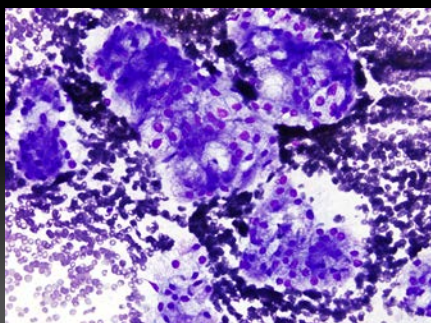
- パピヨン、1歳、避妊雌
- 1ヶ月続く流涎、食欲不振、活動性低下、嘔吐、体重減少、沈うつ
- 下顎腺の両側腫大



症例の様子



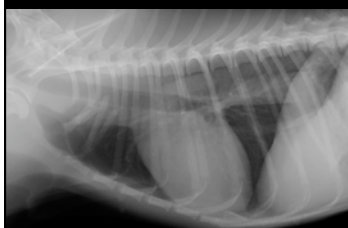
唾液腺の針吸引検査所見



血液検査所見

WBC	(/μl)	11040	GOT	(U/l)	32
RBC	(×10 ⁴ /μl)	525	ALP	(U/l)	198
PCV	(%)	35	GGT	(U/l)	15
Hb	(g/dl)	11.3	T-BIL	(mg/dl)	0.5
PLT	(×10 ⁴ /μl)	70.3	T-CHOL	(mg/dl)	186
PT	(sec)	5.1	GLU	(mg/dl)	104
APTT	(sec)	14.4	BUIN	(mg/dl)	18.4
Fib	(mg/dl)	285.1	CRE	(mg/dl)	0.4
FDP	(μg/ml)	0.4	IP	(mg/dl)	2.8
ATIII	(%)	108.7	CPK	(U/l)	134
CRP	(mg/dl)	1.20	Ca	(mg/dl)	9.7
TP	(g/dl)	6.0	Na	(mEq/l)	137
ALB	(g/dl)	4.2	K	(mEq/l)	3.1
GPT	(U/l)	40	Cl	(mEq/l)	91

胸部X線検査所見



腹部X線検査所見



- 腹部超音波検査：異常所見なし

その他の検査所見

- 犬膵特異的リパーゼ (Spec-cPL)
 - 666 μg/L (参考基準値 ≤ 200 μg/L)
- 抗アセチルコリン抗体測定
 - 0.02nmol/L (参考基準値：0- 0.6 nmol/L)
- ACTH刺激試験
 - Pre 14.4 μ/dL, Post 36.7 μ/dL
- 上部消化管内視鏡検査
 - 粘膜に肉眼的異常なし
 - 病理組織学的検査：軽度の慢性胃炎

治療

- 第 0 ～ 5 病日
 - 静脈内輸液
 - 制酸薬：ファモチジン, オメプラゾール
 - 制吐薬：マロピタント
 - 抗菌薬：セファゾリン
 - 低脂肪食
- 第 6 病日
 - 低脂肪食
 - フェノバルビタール 2mg/kg po BID

フェノバルビタール投薬に対する反応性



経過

- フェノバルビタール投薬後半日で症状消失
- 第6～第57病日(52日間)
 - フェノバルビタール 2mg/kg po BID
 - 症状なし
- 第58～第156病日(99日間)
 - 投薬なし
 - 症状なし

その他の症例

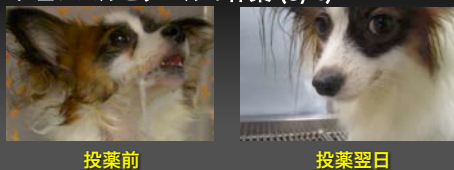
症例	シグナルメント	臨床症状	行った検査	異常所見
2	パピヨン 6歳,去勢雄	流涎 悪心 行動異常	血液検査 X線検査 超音波検査 唾液腺細胞診	なし
3	トイプードル 2歳,避妊雌	流涎,嘔吐 体重減少 行動異常 下顎腺腫大	血液検査 X線検査 食道造影造影検査 超音波検査 唾液腺細胞診 消化管内視鏡検査 探索的開腹手術	低K血症 (2.9 mEq/l)
4	トイプードル 10歳,避妊雌	流涎 鼻汁,鼻閉塞 嘔吐	血液検査 X線検査 CT検査 MRI検査	低K血症 (2.5 mEq/l) 鼻腔内液体貯留

その他の症例

症例	フェノバルビ タール投薬前の 治療	フェノバルビ タール投薬	フェノバルビ タールへの反応性	経過
2	抗菌薬 制酸薬 制吐薬 駆虫薬	第86病日 1.8 mg/kg BID	2日で 症状消失	フェノバルビタール 79日間現在 投薬中 症状なし
3	輸液,抗菌薬 制酸薬,制吐薬 粘膜炎薬 NSAID	第24病日 2 mg/kg BID	半日で 症状消失	65日間フェノバルビ タール投薬後休薬 316日間再発なし
4	プレドニゾン 強肝剤	第2病日 2.2 mg/kg BID	2日で 症状消失	76日間フェノバルビ タール投薬後休薬 119日間再発なし

症例のまとめ

- 流涎 (4/4)
- 唾液腺の腫大 (2/4)
- フェノバルビタールへの迅速(2日以内)かつ
良好な反応性 (4/4)
- フェノバルビタールの休薬 (3/4)



考察

- 原因不明で難治性の流涎,唾液過多
 - フェノバルビタールの試験的投薬
- フェノバルビタール反応性唾液腺症はまれな疾患
 - 8ヶ月間で4症例を診断
- 大脳辺縁系てんかん疑い
 - 病態の解明,診断法の確立

謝辞

- 貴重な症例をご紹介いただいた先生方
- 所沢アニマルメディカルセンター 瀧柳先生
- やすだ動物病院 安田先生
- 城山通りどうぶつ病院 荒明先生
- ドクターオザワ動物病院 松原先生